

<b>Title</b>	真理なしで正当化は正当化されるのか
<b>Author(s)</b>	谷口, 隆一郎
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢, 21(1): 145-177
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=946">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=946</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

# 真理なしで正当化は正当化されるのか

— リチャード・ローティの正当化の概念 —

谷 口 隆一郎

Can Justification without Truth be Justified?:

— On Richard Rorty's Notion of Justification —

Ryuichiro TANIGUCHI

I critically examine Richard Rorty's attempt at unweaving the intertwining lore of philosophical notions of truth—the lore that has been handed on to philosophers today particularly through two branches of philosophical traditions: one is analytic, from F. L. G. Frege through Rudolf Carnap to W. V. O. Quine; the other is pragmatic, from C. S. Peirce through William James to John Dewey. Rorty, who wants to make the former overridden by the latter, presses that the former lore of truth had been debunked not so much wrong as useless. His notorious tenet on truth can be epitomized as follows: we should slough off the metaphysical use of the words “true” and “truth” in the way philosophers in the Western philosophical tradition have put them to use because they have no explanatory use, but are merely endorsing, cautionary, and disquotational uses of the words. Coupled with this is his claim that we should employ a notion of justification in exchange for notions of truth. I first expose the basic weakness in his defense of that notion by juxtaposing it with Michael Dummett's justificationalism. Following Dummett's criticism of Rorty that Rorty heedlessly presupposes meaning without discussion in discussing truth asserted in sentences, I maintain that Rorty should have conferred on his theory of justification an explanation as to how the meanings of words and sentences of our languages are given to us. I hold that, following the lore of pragmatist fathers on truth as *what works*, we should not cancel out the notion of truth as altogether useless. I conclude that justification sans explanation through notions of truth and meaning cannot be counted as justified even on the basis of the pragmatic lore.

---

**Key words:** Richard Rorty, truth, justification, endorsing use of truth, cautionary use of truth, disquotational use of truth, pragmatism, disquotationalism, Michael Dummett, sense, meaning, justificationalism, theory of meaning, Donald Davidson, truth-conditional theory, Alfred Tarski, T-sentence, T-schema, convention T.

われわれの祖父の言い伝えは、文からなる織物である。その織物は、われわれの手の中で、われわれの感覚器官の絶え間ない刺激によって、多少の差はあれ直接誘発された、多かれ少なかれ恣意的で慎重なわれわれ自身による修正と追加とを介して、発展し変化する。それは、淡い灰色の教えであって、事実によって黒く、規約によって白い。しかし私は、その中に、まったく黒い糸が存在するとか、まったく白い糸が存在するなど結論すべきいかなる実質的理由をも見出せなかったのである<sup>1</sup>。

— W. V. O. クワイン —

## 1 真理の否定者と擁護者

マイケル・ダメットは、「真理：否定者と擁護者」（『真理と過去』収録）において、バーナード・ウィリアムズによって提示された<sup>2</sup>、真理の否定者と擁護者に触れ、前者の代表的人物としてリチャード・ローティを採り上げ、後者であるウィリアムズの真理観を前者のそれに対峙させるやり方で、真理の正当化主義の考えを論じている<sup>3</sup>。ダメットは、ローティの正当化の概念が自身の正当化主義における正当化の概念と似かよっていることを認めつつも、ローティのそれは真理なしでの正当化であり、そのような正当化の概念は意味の理論によって構築される意味の概念の説明が与える真理の概念なしでは正当化されないと批判する。本稿は、ダメットの正当化主義との比較を通じて、ローティの正当化の概念を明確にすると共に批判的に検討することを主な目的とする。

ダメットは、真理値の担い手として文と命題のいずれを採るべきかという選択が、両者の論議に共通する根本的な誤りであると主張する。すなわち、真理は文の属性とみなすべきなのか、それとも命題に帰属するとみなすべきか、という二者択一である。難解で知られるダメットの意味論および真理論の主張点は、ヒラリー・パトナムによれば、「ひとつの自然言語に属するすべての文の正当化条件を実効的な仕方ですべての文が正当化可能であるという示唆」と、「経験文の場合においてさえ、決定的な正当化といったものがあるという示唆<sup>4</sup>」にある。パトナムによると、「ダメットは、言語の習得を、諸対応の集合の習得ではなく、ある実践の習得であると考え。彼によれば、話し手が母国語について持っている知識は、その言語に属する文がどのような条件の下で主張可能であるかについての暗黙の知識（一種の認知能力）に存する。〔……〕彼は、文がいつ主張可能であるかの知識を、それがいつ正当化されているかの知識と同一のものとするのである<sup>5</sup>」。

確かに、ダメットは、真理がわれわれの認識（能力）と独立に真偽いずれかであるという「二値の原理」のような、われわれの認識能力を超越した真理概念に異議を唱え、「主張条件（assertability condition）」という概念を提唱している。パトナムには申し訳ないが、ダメットが、言語の諸表現の使い方を習得している人が発話文や叙述文の主張可能性の条件について知識を有する前に何にもまして暗黙のうちに把握していなければならないとするのは、話し手の言語によって作られる、特定の解釈のもとでのトークン文に属する真理についての概念であり、それと併せて、真理概念と不可

避的に結びついている（とダメットが考えるときの）、そのトークン文の意味と理解とを説明する真理条件である<sup>6</sup>。というのも、「真理という概念と、意味という概念とを切り離して説明することはできないのである。それらは、併せてはじめて解明的に説明されるのである<sup>7</sup>」というのが、真理と意味に関してダメットが絶えず主張してきた核心部分であるからである。つまりダメットは、われわれは、真理という概念と意味という概念とが分離不可能なまでに浸透し合っていることを前提とせざるをえないのだ、と強く主張するのである。確かにダメットが言うように、言語哲学の立場から真理を考察するなら、どうしても、真理の概念の説明と併せて、語や文がどのような概念や命題を表現しているかが見えるようになるための、文を作り上げる語彙の使い方、すなわち意味を説明する必要がある。

ダメットによると、真理と意味をめぐる現代の諸議論は、フレーゲ主義者のように、「真」を基本的に命題についての述定だとみなす見解と、デイヴィドソンの意味の真理条件説のように、それが何らかの種類の言語的存在についての述定だとみなす見解とに大きく分かれる。フレーゲに追随して、真理は言明のような言語的項目にはなく、命題ないし思想に属するとみなす根拠は次のとおりである<sup>8</sup>。この説によれば、話し手と聞き手の双方の間にコミュニケーションが成立するのは、取り交わされる発話なり言明の一つひとつの語のあらゆる可能な意味の把握によってではなく、特定の状況で言語的コミュニケーションがなされるときに、それらの語が理解される特定の仕方、ないしそれらの特定の使用——すなわち与えられる特定の解釈——に服するものとして言明を、その言明の意義（sense）や同じ言語の異なる文や異なる言語によって、表現される思想ないし命題が表現されているものとみなす場合である。この場合、真理は命題に帰属するとみなされるのである。真理を命題の属性とみなすことは、意味が真と偽に先立って与えられているとみなすということである。これに対して、真理条件的な意味の理論では、ある言明がどんな命題を表現しているかは、その言明の意味に存するとみなされ、言明の意味はその言語が真であるための条件によって与えられる、と考える<sup>9</sup>。それは、真理を現実のあるいは仮説的なトークン文に属するものとみなす。真理は、命題のような非言語的存在の属性ではなく、言語的表現の属性であるとみなされる。要するに、フレーゲ主義者は、言明の意味を所与とみなし、真理に先立つとみなされた意味によって、真理の概念を説明するのに対して、真理条件論者は、真理の概念を所与とみなすことによって、言明の意味を説明するのである。ダメットが考えるように、真理と意味とは切り離して考えられうるものではないとしたら、真理が命題か文のどちらかの属性である、という二者択一の誤りを犯しているこれらの人びとは、語や文の意味を説明するための相互還元不可能な二つの構成要素のどちらかにその説明を還元してしまう間違いを犯してしまっていることになる。すなわち、それらの要素とは、一つは、「われわれは語や文が表現する概念や命題を把握しなければならない」ということであり、もう一つは、「われわれが把握したものが、その語や文によって表現されているところの概念や命題であることを知らねばならない」ということである<sup>10</sup>。

## 真理なしで正当化は正当化されるのか

ローティのような引用解除論者ないしミニマリストは、前者の構成要素が、ある命題が真である条件を知るための一般的原理を述べるのだと考える。ローティは、「プラグマティズム・デイヴィドソン・真理」において、引用解除的用途については、「「S」が真であるのは、Sである場合かつその場合に限る」という形の、メタ言語的な事柄を述べるための<sup>11</sup>用途があるだけだと述べている。すなわち、「言明「梟は黄昏に飛び立つ」が真であるのは、梟が黄昏に飛び立つときかつそのときに限る」と述べることは、梟が黄昏に飛び立つ、と述べることに等しい。引用解除説は、この引用符が付けられた文（「梟は黄昏に飛び立つ」）を「真」によって述定しても、その述定は多くの述定が主語に属性を与えるのとは異なり、梟は黄昏に飛び立つという主張に何の属性も加えないとして、「真」を空虚な重複でしかない、とみなすのである。引用解除論者にとっては、そうしたタルスキの双条件文は真理について語るべきことを尽くしているとみなされるので、それ以上のことを語ろうとする真理概念は余分なのである<sup>12</sup>。ただ、「T-文」が真であることがタルスキの真理定義に要求されるのではない。その真理定義が要求することは、対象言語に関するすべてのT-文が導出可能であるということである。しかし、タルスキ型の真理定義においては、T-文による真理定義そのものをT-文という概念で説明することはない。ダメットが指摘するように<sup>13</sup>、もしこの説明を試みれば、T-文はどれ一つとしてタルスキ型の真理定義を満たさなくなる。したがって、デイヴィッドソンを始め多くの哲学者たちが認めるように、真理を（厳密に）定義することは不可能に思われる。

この最後の点に関しては、フレーゲを始めとして、主張可能性条件に基づく意味論を展開する正当主義者のダメット、真理を相対主義的に擁護するウィリアムズ、意味論的全体主義の立場を堅持するパトナム、引用解除説に好意的なプラグマティストであり、真理を主張可能性の正当化と同一視するローティ、真理条件論者のデイヴィドソンの間に見解の一致が見られる。しかし、彼らの中でローティだけが、いかなる实在論につながるどの真理概念にも否定的なばかりか、真理に説明的な概念としての役割を与えることを明確に拒否するのである。ローティは、哲学者たちの祖父から受け継がれた織物の白い糸と黒い糸の絡み合い——フレーゲによって始められた、一定の約定の下での、文によって表現される命題の真理値と、文を構成する語句の意義との絡み合い、あるいは、信念と实在との絡み合い——に巻き込まれるのを避けるのである。ローティから見ると、真理という概念の説明が意味という概念の説明の中に埋め込まれなければならないと考えるダメットは、信念と信念ならざるものとの間に「意味」という余計な中保者を立ててしまうことにより、三角関係的な絡みに囚われているように見えるのである。ローティは、これらの哲学者たちが受け継いだ織物を白糸と黒糸とに分析することはもちろんのこと、「淡い灰色の教え」に従順であろうとはしない。ローティは、ウィリアム・ジェームズが主張した真理の「消極的主張」に賛同して、次のように述べる。

「真」という言葉は、たとえば、真なる信念を持つ者の成功を説明したある事態の存在について述べる言葉であるというよりはむしろ、その信念を是認するのに使われる褒め言葉である。哲学者たちがいわば対応関係の微細構造を発見するのに失敗したことから得られる教訓は、そこ〔対応関係の微細構造〕には何も見出すべきものがなかったこと、真理は説明的概念として使用できなかったということである、そう彼〔ジェイムズ〕は考えたのである<sup>14</sup>。

このように考えるローティは、ウィリアムズからしてみれば、真理の否定者なのである。ウィリアムズがローティを真理の否定者だとする理由は、真理が探求の目標だということをローティが否定していることにある。これに対しダメットは、ウィリアムズがローティを批判して、たとえ真理という概念を捨て去って正当化という概念のみを用いるにしても正当化の仕方を正当化するためには真理という概念に訴えざるをえないと考えている、と解釈することにより<sup>15</sup>、ウィリアムズを真理の擁護者とみなすのである。しかしダメットは、ウィリアムズの擁護する真理という概念が相対主義的な概念であることにまったく注意を払っていない。ウィリアムズにとって、倫理文のみならず自然言語における事実言明でさえ「絶対的に」真でありうるのではなく、それぞれの社会に相対的に真であるだけなのである<sup>16</sup>。パトナムが指摘するように、ウィリアムズによれば、たとえば、「ミロシェヴィッチは残酷だ」も「雪は白い」も確かに真理を述べているものとして発話されるが、絶対的な真理を述べているものとはみなされない。ウィリアムズが「絶対的真理」と呼ぶものは、科学研究が収束していく、「信念の確定」としての「確実性の理想的極限」における語彙によって記述されるパース的な真理である<sup>17</sup>。「世界の絶対的な概念」に到達するまでは、われわれはわれわれの特定の視点から独立に存在しているような世界を記述しているのではない。したがって、「ミロシェヴィッチ」という固有名辞も「雪」という指示名辞も「白い」という概念も、そして「残酷」という道徳的概念さえも、人物や事物の諸性質を「局所的な視点」から記述する概念であって、その視点から独立にそれらの性質を記述する「世界の絶対的な概念」ではないのである<sup>18</sup>。

以上のように真理の否定者であるローティは、真理の概念を捨て去り、正当化という概念のみを用いるべきだと強く主張する。以下において、彼の「真理」否定の論点を明らかにし、彼の正当化の概念を吟味する。そして、真理の概念と意味の概念の双方とも不可欠な概念であるという考えに基づくダメットの正当化主義の主張を明らかにする。最後に、両者の正当化の概念の比較を通じて、ローティの正当化の概念、つまり、真理なしの正当化とはどのようなものなのか、そして、ローティがそのような正当化をどのように正当化しているのか、について批判的に論じることにする。そこでまず、ローティが——そして、ダメットも——容認しない、パース＝ウィリアムズ的な「理想的真理」の概念を見ることにする。

## 2 灰色の真理

ローティにとって、「絶対的」用語を用いて真理を説明するという考え方は、ばかげたものに思われる。彼なら、真理を説明するために、ウィリアムズの言う意味での「社会の内部での真理」という言い方はせずに、「正当化された信念」とでもいうような言葉で記述するだろう<sup>19</sup>。しかもローティは、(文化) 相対主義を否定している。彼にとって、相対主義はあくまでも、人間の思想および言語の諸断片と世界の諸断片との間に存する関係項の存在論的同質性 (ontologically homogeneity) の名称として、物理主義的な対応関係を扱う物理主義的真理論と、真理を正確な表象間 (あるいは観念間) の整合性として扱う観念論的真理論とによって成立する言語ゲームの中での、これらに対するリアクションにほかならない。ローティは、ジョン・デューイに倣って、そうした言語ゲームそれ自体を捨て去ってしまいたいのである。そうすれば真理についての相対主義も客観主義も無意味となる、と信じている。ローティによれば、C. S. パースはこの言語ゲームを捨て切れなかった。却ってパースは、これら両方の極の中間的妥協点を見出そうとしたのである。

ローティは、「プラグマティズム・デイヴィッドソン・真理」において、パースの「不徹底な」真理論の意義と欠点を説明している<sup>20</sup>。以下、ローティの説明を、ところどころ修正を施して、論述してみよう。今、次に示される命題 (A), (B), (C) が与えられているとき、物理主義的真理論と観念論的真理論は共に、(A) が真であるのは、(B) である場合そしてその場合に限ることを望んでいる。このことは、(C) が (A) のみならず (B) によっても含意される、ということを両者が主張することを要求する。

(A) 「岩が存在する」は、真である。

(B) 岩が存在する、というわれわれの主張は探求の理想的終着点において正当化される。

(C) 岩が存在する。

さらに、物理主義的真理論と観念論的真理論は、次の (D) をも主張したいと望んでいる。

(D) 「岩が存在する」は、対応——正確な表象——という関係によって、世界の在り方となぎ合わされている。

しかし、両者が行っているこの言語ゲームの進展が、その言語ゲーム以外の、世界の在り方、つ

まり対応や表象という在り方と特に何らかの関係を有しているとする明確な理由がない。なぜなら、信念と世界との間に介在する「対応」や「表象」は、「それらが組織化したり意図したりする事物に対して非因果的關係を有して」おり、「宇宙の他の一切とは独立に変化する」<sup>21</sup>。したがって、ジェイムズやデイヴィドソンが主張するように、もし真理が「対応」や「表象」と考えられるべきであるなら、「真」は説明的用途を持っていないのである。実際、パースは(D)をどの哲学者も受け入れなければならない直感だと信じていたし、今でも多くの哲学者たちは、明示的にせよ暗黙的にせよ、(D)を受け入れている。物理主義的真理論者たちは、(A)を(D)のように分析する。かれらにとって、(B)が真なら(C)は真である(あるいはその逆)、という分析的な伴立は成立していない。物理主義的真理論においては、(B)と(C)を結びつけるのは、意味論的分析や論理ではなく、因果的結びつきを探し当てる経験科学である。他方、観念論的真理論者たちは、かれらの言語ゲームが正確な表象以外の世界の在り方とある関係を有しているとする理由を、次の(E)を示唆することによって、(C)が(F)として記述可能であることに求める。

(E) 世界は、理想的整合性を有する体系の中に配列された諸々の表象から成る。

(F) 「岩が存在する」は、理想的整合性を持つ表象体系の一要素である。

つまり、世界は諸表象の体系であり、表象とみなされる(C)は世界の一要素ということになる。「真理の唯一の基準は表象間の整合性であり、懐疑論を避けつつ(D)を温存する唯一の方法が(E)である<sup>22</sup>」というのが観念論的真理論者の主張である。

パースは、(D)を(B)として分析することにより、整合性と対応との狭間に橋渡しをすることができるように、(E)したがって(F)を持ち出すことなく、実在を定義し直したのである。すなわち、実在とは、それが何であれ、その存在が探求の理想的終着点でなおも主張されるものと定義した。そうすれば、整合性は対応へと漸次単純化されていくものとして理解される。しかも、この単純化は、形而上学的基礎づけとか経験科学による更なる探求の理由づけを伴わずにすむのである。ローティによると、パースの実在の概念は、物理主義的真理論と観念論的真理論が共に犯しているある誤謬を超越しようとするものだった。その誤謬とは、信念(思想)や言語の諸断片と世界の諸断片の間に介在する関係項が存在論的に同質(ontologically homogeneous)でなければならないとする考えである。物理主義的真理論は、時間的空間的な実在のある断片に対応するものは、それと適切な因果関係によって連結された、実在の別の断片以外にない、と信じる。他方で、観念論的真理論は、ある表象に対応するものは別の表象以外のものではありえない、ということを感じて疑わない。パースは、存在論的にまったく同質でない関係項——(B)と(D)——を結びつけることで、同質性の問題を乗り越えることができる、と考えたのである。こうして、パースは、「実在」の定



義をいじることで、整合性と対応という異色な二本の糸の絡み合いがその絡み合いの理想的な最端に至るにつれて中間色へとその色合いを落ち着かせていくものであるかのように、真理の衣を染色し直したのである。

しかし、ローティは、「理想的」という用語は、「対応」という用語と同様、「胡散臭い」と批判する<sup>23</sup>。「探求の理想的終着点」という、パースの考えのいかがわしいところは、いったいどうやってどこが絡み合いの理想的な終着点だと発見できるのかがわれわれにはわからない、ということである。パースのこの考えは、われわれが刺激に対して規約上正しい反応を行っているだけでなく、その反応が確かに実在や事実に対応している、という教えを含んでいる。しかしパースは、この教えが真であることがどうやってわれわれにわかるのか、という問題に答えることができない。したがって、まさにこの教えは、信念と実在との対応が真理であるという考えの正当化を不明瞭に残したままなのである。いみじくもクワインは、「カルナップと論理的真理」において、規約によってのみ真、あるいは規約のみによって真であるような命題は存在しないと論じた。本稿の冒頭で既に引用したが、ここでもう一度引用しておこう。すなわち、

われわれの祖父の言い伝えは、文からなる織物である。その織物は、われわれの手の中で、われわれの感覚器官の絶え間ない刺激によって、多少の差はあれ直接誘発された、多かれ少なかれ恣意的で慎重なわれわれ自身による修正と追加とを介して、発展し変化する。それは、淡い灰色の教えであって、事実によって黒く、規約によって白い。しかし私は、その中にまったく黒い糸が存在するとか、まったく白い糸が存在するなど結論すべきいかなる実質的理由をも見出せなかったのである<sup>24</sup>。

パースは、事実によって黒く、規約によって白い糸の相互浸透によって真理が理想的な灰色となるのは、「探求の終着点」においてのみである、と主張するために、(B)と(D)の主張する条件が一致するだけで主張しただけで、その理由を示めさなかったのである。パースは、存在論的同質性を問題にしないですむ抜け道を提示したが、(D)に含意されている「対応」という考えを捨て切れず、「対応」を信念と実在との関係に関する科学的記述や形而上学的記述によって解明可能な関係だとみなしたために、結局のところ、物理主義的真理論と観念論的真理論との論争を「不徹底な」やり方でしか乗り越えることができなかったのである。

以上がローティによるパースの真理概念に対する批判的解釈である。パースが示唆した真理の概念は、絶対的な用語を用いて記述されてはいないし、ウィリアムズが言うような、「文化や社会の内部での真理」という考えも示唆してはいないが、パースの真理の概念に、ウィリアムズが言う、「確実性の理想的極限」における「信念の確定」としての語彙によって記述される「世界の絶対的な概念」を重ねて見るならば、真理についてのふたりの考えは基本的な部分でかなり似通っていること

がわかる。また、この見解は、『實在論と理性』におけるパトナムの内的實在論——「現在の証拠のもとでの正当化と対比される、理想化された正当化という意味での正当化と、真理とが同一視されるべきである」という見解——ともほぼ同一である<sup>25</sup>。彼らにとって、真理は科学的な探究の漸次的な収斂によって発見され到達されるものである。

しかし、このことを命題として見たとき、その命題が真であるのは、真理が科学的な探究の漸次的な収斂によって発見され到達されるものであるときそしてそのときに限る、ということ、いつ「確実性の理想的極限」に至るのかまったく知りえないで探求し続けるわれわれが、どうやって知ることができるのであろうか。われわれがそのことを知ることは可能だとは思えない。もし、われわれが、そのような収斂は局所的で短期的な出来事だが確実に起こりうるのだ、と確信しているのであれば、それは、そのような収斂が局所的かつ一時的に真理である、とわれわれが信じていることを意味するのである。したがって、「科学的探究の収斂は局所的かつ一時的に真理である」という信念文は、「科学的探究の収斂は局所的かつ一時的に正当化される」という信念文と同じ内容を主張しているのである。ローティが、デイヴィドソンに倣って、言語を、フィールド言語学が記述するときの、信念と環境との因果的相互作用であるとみなして、「真理」という語は理由の説明として役立つと主張するのは、まさにこの理由によるのである。つまり、真であるから正当化されるのではない。そして、いくら誤解を招く言い方をすれば、ローティは、あることが正当化されるならそれは真である、とは考えていないのである。「真」とは、根拠づけ——それが何であり——されている命題に対して与えられる「正当化」という語によって、代置可能な語なのであり、いったん「正当化」によって代置されたなら、不必要となる語なのである。したがって、対応によって与えられる「真」は、タルスキ型のT理論の中に組み込まれる充足関係によって与えられる、語と対象との関係とは無関係なのである。しかし、デイヴィドソンにとって「真理」という語は、意味分析の材料を提供しないとしても、捨て去ってしまうべき概念なのではなく、自然言語の真理条件の意味の理論を構築するためには、不可欠な、あまりにも明白な概念なのである。デイヴィドソンにとって、「真理は、信念や整合性と比べて、美しいほどに透明であって、わたし〔デイヴィドソン〕はそれを原始的だと捉える。真理は、文の発話に適用される場合には、タルスキ型の規約Tに込められた引用解除の特徴を示し、その適用範囲を確定するにはそれで十分である<sup>26</sup>」。よれゆえにデイヴィドソンは、真理の概念を所与とみなすのである。そして、意味を説明するためにそれを用いるべきだと主張する。

このように、ローティとデイヴィドソンは、「真」は充足関係やその他のいかなる関係概念を用いても定義できないと考え、説明語ではないとみなすが、ダメットによれば、真理が定義できないということ、真理が説明できないということは同じではない<sup>27</sup>。ダメットは、真理の概念を意味の概念によって説明する。ローティから見れば、真理と意味とをセットにして考えることは、信念と實在の間に「対応」や「表象」とは別の新たな、真理に関わる余計な第三のものを指定すること

### 真理なしで正当化は正当化されるのか

に他ならない。ローティとダメットにはこうした決定的な違いがあるにもかかわらず、真理を正当化と結びつけて考えている。それでは、正当化と真理の関係についての彼らの考えがどのようなものなのか、そして互いにどのように異なっているのか、そして彼らがその関係をどのように正当化しているのかを見てみよう。

### 3 ローティの正当化の概念：「真」の三つの用途

ウィリアムズは、ローティを真理の否定者であるとする主な理由を、真理が探求の目標ではないとローティが主張していることに帰しているが、ダメットはこの見解を言い換えて、次のように述べる。すなわち、ローティを真理の否定者だとみなすことができる大きな理由は、正当化が探求の目標であると彼が考えているからだ<sup>28</sup>、と。しかし、真理に関するローティの言説をそのように理解するのは的外れである。というのも、ローティは、真理は探究の目標ではない、と断言しており<sup>29</sup>、デューイに追随して、探求の目的は探求そのものにある、と信じているからである。つまりローティにとって、探求にはそれ自身以外に何かの目的があるわけではないのである。彼にとって探求の意義は、進展を追求すること、すなわち、現状よりもより良い状況を追求することである。そして、「良い」とは、時間と歴史を超越した原理だとか実在、あるいは人間の本性とのつき合わせによって、われわれに与えられる哲学的概念ではなく、われわれがこれまでよりも、生の多様な局面において、もっと自由であること、より豊かな生を享受することといった、現実の日常的生の改善ないし進歩を指している。このことを念頭に置いた上で、ローティとダメットにおける「正当化」という概念の比較を通して、正当化についての両者の見解の違いを明らかにしよう。ローティが考える正当化とはどのようなものを理解するために、まず、それについて述べる際に引き合いにされる「真」ないし「真理」という語についての彼の見解を明らかにすることから始めよう。ローティは、「真」には説明的用途はなく、次のような使い方があるだけだと主張する<sup>30</sup>。

- (a) 是認的用途
- (b) 注意喚起的用途——「Sは完全に正当化されているというあなたの信念は、おそらく真でない」という発言の類いにあるような「真」の使い方。正当化は、Sの根拠として引用される信念に対して相対的であり、その信念以上のものではない、ということ。そして、そのような正当化は、もしSを「行為の規則（パースによる真理の定義）」として捉えるならば物事はうまくいく、ということは何一つ保障するものではないということ。注意喚起的用途は、これらのことにわれわれの注意を促す。
- (c) 引用解除の用途——「「S」が真であるのは、Sである場合かつその場合に限る」という形の、メタ言語的な事柄を述べるための用途。

ダメットは、ローティはこれら三つの用途の間の関係を明確にしなけらばならいにもかかわらず、それらの関係についての説明を放棄している、と非難しているが<sup>31</sup>、私は、それらの関係は可謬主義という点において密接につながっていると考える。しかしローティは、これらの中の関係を説明することに努力を払っていない上に、真理がこれら三種類の使われ方に集約できると断じきってしまっているのでは、ダメットでなくても、そうやすやすと受け入れられるものではないと感じてしまうのも当然である。このことを断っておいた上で、以下、それぞれの用途について私なりの解釈を加えつつ説明し、それらの関係を明らかにしよう。

(a)は、田中が「S」という意見を述べた後で、鈴木が、「そのとおりだ」という意味で、「それは真だ」と述べる場合に用いられる「真」の使い方である。この用途では、必ずしもSの保障された主張可能性(warranted assertability)だとか規範性が正当化ないしは証明されているわけではない。その上、是認されたSやその命題がそのまま是認され続ける保証はない。Sをめぐって、田中と鈴木の間には、Sが是認されているという事態があるだけであり、この事態は変わりうるのである。デイヴィッドソンが述べているように、このような二つの発話を一つの文にして即座にT-文を作ることが可能である。すなわち、「「S」が真であるのは、Sの場合かつその場合に限る」という文によって表現できる。このT-文においてわれわれは、直示的な「その」によって世界について語ることから言語について語ることへと進み、(直観的な)真理の概念によって世界について語ることへと再びつれ戻される<sup>32</sup>。しかしローティが「是認的用途」で言いたいことは、直示的指示代名詞によって鈴木は、田中の発話文そのものについてだけ語り、すなわち、ふたりのコミュニケーションが成立している状況のいかに拘らず、その脈絡とは無縁に田中の発話だけについて語るのではなくて、日常的な経験の中で田中に賛同するときの鈴木の態度を表明しているにすぎない、ということなのである。

(b)は、田中の聴衆の一人である山田が、自分の主張を正当化している田中に対して、「なるほどそれは今のところは完全に正当化されてはいるが、いずれ真ではないかもしれない」と言うことで、異なる聴衆にとってはその正当化では不十分である事態がいずれ起こるであろうこと、つまり、正当化されたSは、異なる聴衆の前では誤謬であることを田中に注意喚起する場合の「真」の使い方である。「Sは正当化されているが、真ではない」と述べることは、いずれ到達されることが当然信じられるような「真理」という、正当化とは別のより確定的な正しさが獲得されてはいないが、それはいずれ獲得されるのだ、と述べることを意味しない。(b)は、今Sは正当化されるが、より強い論拠を要求する聴衆が現れたとき、かれらに対してよりよい正当化が要求される、ということを書いてある。「真」の注意喚起的用途が持つ全体的効力は、正当化がある聴衆に対して相対的であること、そして、われわれには正当化可能な信念が正当化可能でなくなるような、あるより優れた聴衆が存在するかもしれないしあるいは将来存在する可能性をわれわれは決して排除できない、ということを描き出すところにある<sup>33</sup>。注意しなければならないのは、終局的な真理を確証するの

に絶対的な正当化をわれわれに期待させうる理想的な聴衆は存在しない、ということである。すなわち、「真」という語は、「よりよい正当化」という語句と同じ意味で用いられているだけであって、「正当化」とは別の、それを凌ぐ何か高次の、あるいは究極の目標を指示するのではないし、(パースの灰色の真理のように)正当化がそれに収斂していくところの何かを示唆するのでもない。(b)は、より優れた聴衆に対してはより優れた正当化が要る、ということを田中に注意喚起するだけである。

(c)は、田中の「S」という主張について、意味論的にその真理条件を特定する用途である。つまり、「S」が真であるのは、Sであるときかつそのときに限る」というT-文の引用符を解除された右辺は、左辺の引用文の真理条件を特定する。これは、自然言語についてのタルスキ型の真理の理論である。双条件の右辺は左辺の特定の翻訳である。このT-文では左辺の対象言語が右辺のメタ言語に含まれているが、たとえば、「La neige est blanche」が真であるのは、雪が白い場合そしてその場合に限る」のように、対象言語がメタ言語に含まれていないT-文の場合は、右辺のメタ言語の翻訳の性格はより強いものとなる。

しかし、真理の理論はこの広く受け入れられているT-文と規約T<sup>34</sup>が正しいことを説明すべきだという見解は見当違いだ<sup>35</sup>、とするダメットの指摘は、正しいと思われる。なぜなら、T-文の左辺と右辺、すなわち、「関東東海沖地震はやがて起こる」と「関東東海沖地震はやがて起こる」は真である」は、同じ主張内容 (assertoric content) を持つが、それぞれの構成部分意義 (ingredient sense) が同じとは限らないからである。主張内容とは、読み手ないし聞き手がそれを正しいとみなしたときに、その人がそれを信じるようになるころのものである。文が、それが部分文を構成しているようなより複雑な文の主張内容ないし意義にどのような寄与 (構成部分意義) をなしているかは、必ずしもその複雑な文自身の主張内容によっては決定されないのである。それゆえに、これら二つの文を双条件によって一つの文にしてできるT-文の中には、両文の主張内容とは異なる意義を持つものがありうるのである<sup>36</sup>。それゆえに、T-文が「正しいとみなされるかどうかは、われわれが好む [favor] 特定の意味の理論と、そこに組み込まれる意味論的理論に依存することになる<sup>37</sup>」。

ローティは、「われわれプラグマティストはしばしば [……] タルスキの風通しのよい引用解除説が真理について語るべきことを尽くしていると示唆してきた<sup>38</sup>」と断言している。ダメットが正しくも指摘するように、「このタルスキへの言及は歪んでいる。[……] 「T-文」が真であることは、タルスキの真理論の一部ではない。正確に言えば、対象言語に関するすべてのT-文が導出可能であるということが、真理定義の十分性の基準なのである<sup>39</sup>」。私の知る限り、反実在主義者であるローティは引用解除の用途を是認する明確な理由を述べてはいないが、その理由は恐らく、アキール・ビルグラミが指摘するように、「引用解除はプラグマティズムにとって「真である」についての受け入れ可能な特徴づけであるとローティが考えたとしても驚きではない。というのも、引

用解除は、翻訳の特殊なケースを生み出すのであり、したがってそれは、成功を収める解釈において現れる実践的な意義を、正しい経験的な助けによって、持つ<sup>40</sup>」からであろう。加えて、デイヴィドソンに賛同してローティは、真理を信念と実在の間についての表象的な関係、したがって対応関係であると引用解除の用途をみなすいかなる主張をも伴わないで所与の言明についてのメタ言語を扱うことによりその言明の意味を考察できる、という考えを受け入れているからであろう。

しかし、デイヴィドソンの、「真理はプリミティブな概念である」という考えが、ローティには、真理を無条件性と結びつけているように思われるにちがいない。「真」についてのこれらの用途の説明を、注意喚起的用途においてみられる、ローティの可謬主義に絡めてみるならば、それらの用途の間の関係が見えてくる。真理を無条件性とみなすことは因果関係の外に真理を据え置くことを意味する。既に見たように、これは存在論的同質性の過ちを招いてしまう。すなわち、それは真理を正確な表象間あるいは観念間の整合性として扱う観念論的真理論につながる。真理を実在とのつき合わせによる対応関係とみなすのを全面的に拒否して収斂主義を否定するローティの可謬主義においては、真理はそうした無条件性とは無関係であることは明らかである<sup>41</sup>。このように、「真」の引用解除の用途と注意喚起的用途は可謬主義において結びついている、と言えるのである。是認的用途についても、先に説明したように、注意喚起的用途と同様、異なる聴衆はSを是認しないことは当然ありうることを思えば、是認的用途は注意喚起的用途の特殊なケースだと考えることができる。そして、是認的用途は、日常的経験における賛同の態度の表明から、相手の言明なり発話が表現される文へとわれわれが進むとき、引用解除の用途へと移行するのである。このように考えるならば、真の三つの用途のうち、是認的用途と注意喚起的用途は経験的な概念であると言える<sup>42</sup>。

「真」の三つの用途でローティが主張していることは、「真」という語の注意喚起的局面は正当化などの他の概念に還元することができないということである。つまり真理は、他の用語に換言できないということであり、定義不可能であるということなのである。だからといって、真理はわれわれの探求とは独立に、すなわち因果関係の外に存し、われわれがそれを探求によって発見するのではない。真理についてのローティの考えは、「真理」という語で哲学が伝統的に語ってきたものについて言及することを一切やめるべきだ、つまり真理は探究の目標だとする考えを捨て去るべきだ、ということにほかならない。このことはローティの批判者たちによってしばしば誤解されてきた。たとえば、「真理の注意喚起的用途は、真理はすべての正当化を越えていることを示しており、だからこそ、われわれは、われわれのどの信念が、正当化されるのとは対照的に、真理であるのかを知ることができないのである<sup>43</sup>」というビルグラミのような見解はローティの正当化概念を誤解している。確かに、「ローティは、デイヴィドソン同様、[……] 目標としての真理を喜んで捨て去る」のだが、「[ローティは、] 唯一の目標は正当化である、と言う」とビルグラミが述べるとき<sup>44</sup>、そして彼がローティの可謬主義を「真理は手が届く目標ではないのだから、まったく目標ではない<sup>45</sup>」と解するとき、彼はローティの可謬主義を捻じ曲げてしまっているのである。ビルグラミは、ロー

ティが探求の目標の座から引き剥した真理——ローティはその座を別のもので埋めようとはしないで、むしろ真理を哲学的に追究することを無効にしたいのだが——と引き替えに、もともと可謬である正当化をその空座に宛がうのだと誤って理解しているのである。ローティにおいては、正当化と真理との間には結びつきはなにもない<sup>46</sup>。なにもないから、一方を他方で置き換えることはできないのである。正当化はその時々正しいと受け入れられるもの、「偶然性的でつかの間」であり、真理は「永遠」であるので、「両者の狭間を渡す道はないのである」<sup>47</sup>。ローティがデイヴィドソンと共有する命題である、「世界についてのわれわれの信念のどれが真であるか、われわれは決して知ることはできない」から、注意喚起的命題である、「世界についてのわれわれの信念のすべては間違っているかもしれない」は帰結しないが、両命題とも「何が真であるかそうでないかを見分ける基準を設定する、世界についての理論」という「図式-内容の区別」とは無関係である<sup>48</sup>。「図式を形成しあるいは基準を設定する、純粋に白く疑念の余地のない信念などひとつとしてなく、ただ灰色の色調——現実的で潜在的な疑わしさやわれわれの信念体系への求心性の程度——があるだけである、ということのをわれわれ〔ローティとデイヴィドソン〕は主張しているのである<sup>49</sup>」。

#### 4 ダメットの正当化主義

以上、ローティの「真」の三つの用途の説明とそれらの相互関係が明らかとなった。このことによって、これらの用途の間の関係が不明であるとするダメットの批判を完全にではないにしてもかなりの程度かわすことになるだろう。また、真理ではなく正当化が探求の目標であるとローティは考えていないことも今や明らかであろう。そうすると、正当化が探求の目標だとするところにローティの真理についての説明の重大な欠点があると見るダメットの議論はほころびを見せることになるが、だからといってダメットの批判が無効になるのではない。むしろ、意味と真理とを切り離して考察すべきではないという一貫した前提に立って、正当化の概念を言語哲学上の慎重な検討の中で論及しているダメットの、ローティの「真理」否定論に対してなされる批判の核心部分は、ローティも支持する引用解除説、そしてローティが彼の真理についての言説を依拠させているデイヴィドソンがその代表的な論者のひとりである真理条件論の双方ともが真理という概念を必要とする、ということを明示するところにある。以下で検討するダメットの正当化主義と、ローティの正当化の概念との違いは、実に、意味の理論における真理の概念の不可欠性を認めるかどうかにある。

ダメットによれば、引用解除説にとって「真理の概念は、ある命題の内容を知ることとはその命題が真である条件を知ることである、という一般的原理を述べるためにのみ必要」であって、「その原理のどの特定の適用においても、真理概念は余分」なのだが<sup>50</sup>、引用解除説は、文と命題の区別を拒否すべきだと主張することから、「梟は黄昏に飛び立つ」が意味することを知るとは、梟が黄昏に飛び立つことのために成立する条件を知ることだ、とみなすのである。しかし、この条件を

知ることは、「梟は黄昏に飛び立つ」が意味することを理解しておくなければならないことの一つでしかない。それは、「梟は黄昏に飛び立つ」という命題の内容を知ることの説明足りえるが、「梟は黄昏に飛び立つ」という言語的表現を理解すること、すなわち、言語的表現の綴りや音声を与える心理的効果の複合から切り離されては起こり得ない言語的理解を得ることの完全な説明ではない。「特定の文の意味を知ることとはどのようなことかを、その文に言及することなく、完全に説明すること、あるいは、ある文を理解するとは一般的にどのようなことかを、いくつかの文に言及することなく、完全に説明すること、そういうことはだれにもできないのである<sup>51</sup>」。したがって、引用解除論者（そしてミニマリストとデフレーションリスト）は、T-文の双条件の左辺の文から引用符を取り去ることのできる言明がどのような命題を表現しているか、つまり、その言明がいかなる命題を表現しているかを理解するためにはその言明とその中の語の意味を知らなければならない。ダメットは、ローティが言明の意味について緻密な考察を行うことに無頓着なのを批判して次のように述べる。

ローティは、われわれの言語や文の意味がわれわれにどのように与えられると彼が考えているのかを言わないのである。彼は真理を検討するが、意味は検討しない。しかし彼にとっては、古典的な真理の理論がそうであったように、意味という概念は真理という概念に先立たなければならないのだ。ウィリアムズとローティは共に、真理という概念と意味という概念とを併せて説明するのではなく、前者を後者から独立に論じるという、同一の根本的な哲学的誤謬を犯しているのである<sup>52</sup>。

引用解除説が意味を所与とみなすことは、自らにとって、「真」という語の扱いに関して厄介な問題を招く。というのも、引用解除説はT-文の左辺に適用される「真」の意味についてはいかなる説明も与えていないのである。今私はこの文章を日本語で書いているのだが、引用解除説が、日本語のT-文において日本語の言明の意味を所与のものとみなして、日本語でなされた言明に「真」という語を適用する場合、「真」という語の意味についてどのような説明も与えていないのである。したがって、ダメットが正しくも指摘するように、引用解除説は、（そして、デイヴィッドソンの根源的解釈も、）自らが作るT-文の読み手なり聞き手が「真」という日本語の言葉の意味を既に理解していることを暗に当てにしているということになる<sup>53</sup>。引用解除説がある言語に対して述語「真」を定義すること、すなわち、真理定義は、その言語の中で表現される言語を理解されているものとみなしているだけでなく、定義される「真」という語の意味をも理解されているものとみなしているのである。しかも、その言語が対象言語と同一であるならば、対象言語も既に理解されているものとみなしていることになる。要するに、T-文の双条件の両辺の言明が理解されているのではなくてはならないのである。いかなる説明も与えられていない「真」を既に理解されていると見込まれ



るT-文の左辺に使用するには、「梟は黄昏に飛び立つ」という文の意味を説明するために、「真」という語の使用を正当化する何らかの概念、通常、それは真理の概念とみなされるような概念なしで済ますことはできないだろう。ダメットのこの議論は、真理条件論にとっても真理の概念が必要だという彼の議論と併行している。彼は、真理条件論はT-文の両節に「真」という語、すなわち「真」という概念を適用せざるをえないとして次のように論じる。

真理条件論者は、彼が意味の理論を与えようとしている言語での言明の意義とは、その理論が真なる命題を表現する条件である、と規定するであろう。その言語がアラビア語だでしょう。その理論は、どの命題が文「白鳥は死ぬ前に歌う」のアラビア語翻訳文によって表現されているのかを、どのように決めるべきなのであろうか。その論者は、もし彼が真理条件論の原理に忠実であるべきであるならば、その命題の真理条件がそのアラビア語文の真理条件と一致するような、当のその命題をその翻訳文が表現していること、という基準以外に他のどんな基準を採用できるだろうか。そのように彼は、「真」を文にも命題にも適用されるものとして使わざるをえない。したがって、問題のアラビア語文によって表現される命題を同定するためには、彼は彼の意味の理論から、そのアラビア語文の真理条件は白鳥が死ぬ前に歌うことだ、ということを出導できなければならない。それゆえに、真理条件論者は、[……] 個々の文（必要ならば、ある解釈のもとでのそれらの文）がどの命題を表現しているかを決定するために、そのような解釈を受けた文に適用される真理の概念を必要とするのである<sup>54</sup>。

さらにダメットは、数学的言明の意味についての直観主義的な説明においては、何がその言明の証明であるか、つまり、言明が真であるという概念がまったく不用であり、正当化だけが必要な場合があるが、数学的言明に対する意味の理論全体としては、真理の概念が不可欠であるとして、相互に合致する二つの理由に言及している。第一の理由は、「意味の理論は、その任務の一つとして、演繹的推論の手続きに関する説明を与え、また、演繹的推論の妥当性の規準を与えなければならない」のであり、「演繹的論証が妥当なのは、その論証によって、あるある望ましい性質が前提から結論へと伝達されること」であり、「その性質は、通常、真理だと考え」られている、ということである<sup>55</sup>。そして、文の主張内容（assertoric content）という概念が、第二の理由を与える。一般的に、ある言明は、その主張された内容が正しいならば、真とみなすことができる。「もっと正確に言えば、もしその言明を主張することが正当化されるだろうならば、特定の話者がその主張を行うことが正当化されたかどうかにかかわらず、われわれはそれを真だとみなすことができるのである<sup>56</sup>」。これらの理由に従えば、真理条件論が真理という概念を不可欠だと考えるのは正しいといえる。しかしダメットが言うように、真理条件論は、単に真理の概念が不可欠だと論じるだけでは

足りないのである。というのも、異なる意味の理論には異なる真理の見方がある、つまり、異なる意味の理論には異なる「真」という銘辞の使われ方があるのであるから、真理条件論はそれ自身の真理の見方と同じ真理の見方をわれわれも持つべきだ、と示すのでなければならぬからである<sup>57</sup>。

ダメットによれば、真理条件的な意味の理論には、彼が「正当化主義」と呼び、擁護するところの意味の理論が対立している。正当化主義の意味の理論とは、「言明を主張する根拠によって与えられる意味の理論<sup>58</sup>」である。この理論は、意味を説明するために併用すべきこれら二つの理論のうちの一つなのだという。もう一つは、「ある言明から、その言明を主張する（あるいは、受け入れる）根拠につり合う帰結だけを引き出すこと、そして、ある言明を、その言明からわれわれが引き出す帰結を正当化する根拠に基づいて受け入れる<sup>59</sup>」という、意味の理論である。ダメットは、このような意味の理論を「プラグマティズムの理論」と呼ぶ。正当化主義の理論は「あることを真として確定する概念」を含み、プラグマティズムの理論は「あることの真理に基づいて行為するという概念」を含んでおり、両者は共に真理をその一部として含む概念である<sup>60</sup>。しかし、ローティやデューイやジェイムズなどのプラグマティストとその賛同者が、真理に基づいて行為することを形而上学的な真理の概念と結びつけて考えているわけではないので、このような類型化は、彼らから見れば、意味という概念の説明の中に真理という概念の説明を埋め込んで考えようとするダメットによって都合よく設定されたものでしかない。少なくともローティならそう述べるだろう。

ローティが、真理について説明する際に、少なくともダメットが要求するようには意味の理論を展開しない一つの理由は、世界の諸事実の全体についてダメットの見解とは反する見解を採っている点にある。ダメットにとって事実とは言語化された命題にはかならない。すなわち、「真理という概念は、意味の理論が形而上学と関係づけられるところの回転軸なのである。形而上学は、実在の一般的本性に関わるのであり、『論理哲学論考』の冒頭の所見が言明しているように、実在は諸対象の全体からではなく、成り立っている諸事実の全体からできている。事実とは、異なる命題である<sup>61</sup>」。

このようにダメットは、意味の理論なくしては探究できないと彼が考える、真理の概念と正当化の概念は形而上学的諸問題や認識論的諸問題——ローティがまさしく哲学から解消してしまいたい問題群——と深く関わっている、とみなすのである。ローティにとって事実とは、われわれが言語を介してのみ関わるのが可能なものではない。彼にとっては、そういった問題群はもちろん、言語でさえもわれわれ人間が作り出したものなのであって、事実ないし実在はわれわれが作り出すものである。そのように考えるローティにとって、意味の理論が与える「意味 (sense)」によってわれわれが事実を理解することは、「われわれの言葉と世界との間に入る存在者」、すなわち余計な「第三のもの」を世界とわれわれとの間に介在させ<sup>62</sup>、その結果、意味の背後に広がっている世界だとか実在へ至ろうとするわれわれの形而上学的な衝動を掻き立てることにつながるのである。ローティは、そうした問題とは関わりのない、フィールド言語学者の目的に役立つような意味の理論を

求めるデイヴィドソンと共に、言語的命題と世界との対応という考えを自分は捨て去るのだ、と言う。ローティによれば、「デイヴィドソンは、論理的経験論が当然のものとなした図式-内容の二元論を徐々に破壊することによって、いわば、論理を保持しつつ経験論を捨てた（もっとよい言い方をすれば、言語への注意を保持しつつ認識論を捨てた）のである<sup>63</sup>」。これに対して、ダメットはまだ認識論、すなわち「旧い形而上学的衝動<sup>64</sup>」に屈しているのだという。ローティのこの指摘は、われわれがダメットの次のような言説に触れるとき、正しいように思われるにちがいない<sup>65</sup>。

われわれは、まとまった世界像を組み立てるために、われわれ自身の観察や推論によって獲得する情報と、会話や書物によって他人から知らされる情報を用いるのである。ある言明を、この世界像に寄与するもの、すなわち、われわれの意志から独立した実在の像に寄与するものとみなすということが、その言明を真とみなすということなのである。それゆえ、言語使用という、われわれが従事するようになる実践は、われわれが真理概念を暗黙裡に把握していることをまさに告げているのである<sup>66</sup>。

ローティにとって、「われわれの意志から独立した実在の像」への寄与 (contribution) として言語をみなすことは、彼が飽くことなく批判し続けてきた、世界をわれわれの認識に映し出す鏡と捉える態度にほかならないが、ダメットはこの引用文において、実在との一致という古めかしい実在論を容認しているのではない。ダメットのこの語りの中核部分は、何が真であるかをわれわれが知るのには、われわれの知的な努力により得られる情報と日常のやり取りから得られる情報とが、言明という形で言い表され、これらの情報を用いて構築されるわれわれの世界像に対して寄与をなすかどうかを知ることだ、ということである。こうした寄与が、われわれが言明を真とみなす条件であるということは、「その〔特定の言語の任意の言明の〕真理条件から、その言明を主張する根拠であるものと、その言明を受け入れることが話し手と聞き手の行為に影響する仕方とを、われわれがどのように決定することができるのかを示す<sup>67</sup>」ことである。ダメットがこのように示唆するとき、彼は、先に触れた、正当化主義の二つの理論から語っているのである。すなわち、彼は、真理は言明を主張する根拠と行為に影響する仕方から決して独立に存在するのではない、と述べているのである。われわれは、ダメットの次のような論述に目を向けるならば、彼が真理についての反実在論的立場にいるのを知る<sup>68</sup>。

われわれがしてはならないことは、真理を、どの言明も確定的に持つか、確定的に欠いているかのいずれかである性質、われわれがそのいずれかであることを確定する何らかの手段を持っているかどうかとは独立に確定している性質である、とみなすことである。われわれに正当化主義の意味の理論を採用するように促したものは、そもそもこの古典的な真理

の見方の拒絶に他ならなかった。もし言明の意味が、その言明の主張を正当化するであろうものによって与えられるのであれば、その言明が真であるということの唯一の見方も同じ見地から与えられるのでなければならないのである<sup>69</sup>。

このように表された、ダメットの意味の理論を支えている今や正当化主義と改名された反実在論は、ローティから見ると、風通しの悪い反実在論である。しかし、ローティは、何度か彼の著作において、語彙とその使用に関するウィトゲンシュタインの考えを参照にして持論を展開するとき、特定の言語の語や文の使用という共同の実践がその言語を知っていることの基準であるとみなすダメットのこうした「使用」の考えを参照している<sup>70</sup>。それなのにローティは、「プラグマティズム・デイヴィッドソン・真理」では、「Sに関するXの理解は、ダメットが思い描くような種類の認知能力には決して明示されていない<sup>71</sup>」と言い切る。そして彼は、マイケル・デヴィットのダメット批判を引用して、「彼（デイヴィッドソン）こそ、デヴィットに同意し、ダメットに反対して、「人がある言明について持っている命題的知識は、どれも彼の言語能力以上のもの——つまり、その言語に関する理論形成から得られるもの——である」<sup>72</sup>」と述べるのである。人がある言語について持っている命題的知識は、それが記述された文で表された場合には言語能力以上のものである、とダメットが言うとは断言できないとしても、それが知識として言語化され記述される以前であれば、それには発話者の声の抑揚が与える感性的、心理的情報が含まれるだろうから、言語能力以上のものであると言うかもしれない<sup>73</sup>。デヴィットは、ダメットの意味の理論は、「Lの話し手によるLの文の理解は、その文がかくかくの状況でLにおいて真である、ということとその話し手が知っていることに存する」ということを前提にしたときに、論理的推論によってその話し手が「Sの意味なるものが存在することを直接知っている」ということを導き出そうとするものだ、と解釈するが、私にはそのようなダメット解釈は適切だとは思われない<sup>74</sup>。なぜなら、語や文の使い方についてのダメットの言及は実践を意味するからである。それは、言語共同の実践であるがゆえに、共同に関わる者たちとの会話や非言語的コミュニケーションから習得されるのではなくてはならないはずである。そして、そういった言語的实践において、われわれが、「ある言明を真であるとみなすのは、その言明の正当化を見つけることが可能であるか、可能であったかの場合である、と考えた方がよいかもしいない<sup>75</sup>」のだという。そうであるとすれば、言明の正当化はその実践的可能性に左右されることになり、単に言語能力だとか論理的推論だけに依拠するのではないことになる。そうした正当化は、一種の認知能力に依拠するにしても、むしろ、パットナムの言葉を借りれば、「暗黙の知識」と呼ぶ方がその性質をよく言い表せうような共同的な言語の実践に依拠する、と私は解釈する。

以上のダメットの正当化主義の検討から彼の真理の概念について言えることは、真理とは、特定の解釈が与えられたトークン文の意義（sense）がその解釈者の世界像になす寄与である、ということである。その寄与によってわれわれに知られる真理は大文字化された「真理（Truth）」ではな

い。真理 (truth) は個別のあるいは共同体的な特定の解釈が施されたトークン文の属性である、と言った方がよいかも。信念と世界との間には「真ならしめる」という関係はない、というテーゼをプラグマティズムの重要な特徴の一つだと信じているローティは、ダメットの正当化主義がこのテーゼに反しているとみなす。しかし、既に見たように、ダメットは、真理が、「どの言明も確定的に持つか、確定的に欠いているかのいずれかである性質、われわれがそのいずれかであるかを確定する何らかの手段を持っているかどうか」に依存的に確定するような性質である、と考えている。ということは、ローティが述べているのとは反対に、特定の解釈が施されたトークン文の言明に表現される意味と真理について何かをわれわれが知るのには、世界がその言明を真ならしめることによってではない、ということなのである。つまり、真理を確定するのは、世界の側にあるのではなく、それを表現する言明に解釈を与えるわれわれの言語使用という共同実践の側にあるのである。

ダメットは、彼の正当化の概念がローティに見られるような正当化の概念に似ていることを認めて、正当化主義的な意味の理論は、「われわれが、言語使用という実践を獲得するとき、いくつもの異なったタイプの諸主張を正当化するものとみなされるのが何であるのかを学ぶ<sup>76</sup>」理論であると述べる。そして、それは、真理条件論者が、個々の文の命題を正当化するために、それら個々の文の真理条件を説明することによって、それらの文の特定の意義を理解する場合に必要な真理概念の説明にも含まれるものであるという。つまり、「言明が真であることの証拠だとみなされるものが、言明が真である条件だとみなされるものからどのようにして導き出されるのかを示すという可能性は、[……] 真理条件的な意味の理論が応ずべき要求なのである<sup>77</sup>」。「この種の理論〔正当化主義の意味の理論〕によれば、言明の意味を把握するとは、何がその言明を主張したり否定したりすることを正当化するのかを知ることなのである。[……] われわれの真理の概念は意味のモデルに適合すべき〔つまり、両者は併せて論じられなければならない〕であるから、そのような意味の理論に適切な真理概念もやはり、正当化によって与えられるのでなければならないのである<sup>78</sup>」。

## 5 真理・意味・正当化

ダメットが、真理はわれわれの言語使用の共同実践によって知られると主張するとき、そしてローティがジェイムズに言及して、「行為することとこれに含まれる主張することについての正当化に関する全てをひとたび理解するならば、善さと正しさと真理について理解すべきことは全て理解したことになる<sup>79</sup>」と言い切るとき、彼らは少なくとも、言明の主張と真理の理解はわれわれの行為によって得られると主張しているという点においては、見解が一致しているといえる。しかし、そうであるからといって、ダメットは、「善さと正しさと真理について理解すべきことは全て理解したことになる」とは信じない。なぜなら、彼は、「正当化と真理との対立は、われわれの意味の

理論がいかなる形をとるべきかに決着をつけるまでは、解決されない<sup>80</sup>」、とみなしているからである。そして、様々な意味の理論には様々な真理の理論があるのであるから、その対立は解決しそうにない。正当化についてのふたりの見解の食い違いは、結局のところ、何が真であるかを正当化するために形而上学的思考を受け入れるかどうか、つまり、正当化という概念が形而上学的理解を要求するかという、解決しそうにない問題に帰着する。ダメットとローティは共に、真理という概念ではなく正当化という概念が中心的だと考える。既に明らかのように、ローティは、古典的なものであろうがそれが新たに洗練した形に修正されたものであろうが、それを拒否するが、ダメットは言語使用の共同の実践とは独立して存在するとみなす古い形而上学に限って拒否するのである。この点でローティが、「伝統的な形而上学的諸問題と結びつくような言語哲学が必要<sup>81</sup>」だという考えをダメットに帰するのは早急な理解である。とはいえ私には、ローティが批判するように、ダメットにとっての基本的なテーゼ、すなわち、「真理と意味は併せて説明されなければならない」こと、ないし、「真理の概念の説明は意味の概念の説明に含まれなければならない」ことが、形而上学的な思考に牽引されていると思われる。

形而上学に対する彼らの態度の違いは、どこにあるのであろうか。このように問うことは、その態度が何に、つまり、どんな概念に、由来しているのか、あるいは、それをそのようにならしているところのものとは何であるのか、すなわち、その違いの本質は何か、などと問うことは異なる問いである。そのような問いは、ローティとデイヴィドソンのような人びとにとっては、果てしなく繰り返される思考の円環の中にわれわれを引きずり込む出口のない無益な問いなのである。ダメットにはそのような本質を問い詰めるような問いを立てる傾向がある<sup>82</sup>。デイヴィドソンは、そのような問いを慎むことが真理の中心性と原始性を認めるために不可欠だと考える<sup>83</sup>。ローティは、真理の中心性と原始性を認めない。そして、彼は、言語を基礎づけているもの、あるいは言語がそれに適合するような言語の外部にある何かへ到達しようとするもの、あるいは言語に何かを表現させるところのそのもの、すなわち、言明文を構成する語に意味を与えるもの、を言語の背後へ回って探し当てるような方向へとわれわれの衝動を掻き立てる問いを拒否すべきだと主張する。というのも、彼にとってそういった問いは、デリダの戦略に見られるように、始原の痕跡を辿ることであり、形而上学的衝動に絡めとられてしまうといった危険を招く問い、すなわち、人間的な営為を超えた、それとは因果的結びつきを持たない崇高なものへの到達の希望をわれわれに抱かせてきた伝統的な哲学の問いである<sup>84</sup>。

ローティは、そういった問いにプラトンの前提、すなわち、ハイデガーが形而上学とはプラトン主義としてあると言った形而上学的思考があることを見出す。「その前提によれば、「真理」と一般的に言われているもの——真なる言明を集めたもの——は低級なものと同級なものに、(プラトンの言い方では)単なる意見と純粋な認識とに、分けて考えられるべきだというのである。つまり、「昨日雨が降った」といった文と「人は取引において公正であるように努めねばならない」とい

た文との間に不公平な区別を設ける〔……〕<sup>85</sup>」べきだというのである。この区別が不公平なのは、双方の文とも関心の究極的な対象——前者にとってはあるがままの事実、後者にとっては道徳律——との一致とか対応によって、同じように真であるとみなされるのに、双方の間に優劣が付されるからである。この優劣の区別は混乱した区別である。ローティが言うように、ホッブスからカルナップへと続く実証主義の伝統にとっては前者のような文が、そして、プラトンからカントに続く超越論的哲学の伝統にとっては後者のような文が、真理とはどのようなものなのかを示すものであり、それぞれの伝統にとってもう一方の文は、真理の理解には直接的に役立たない一段階劣ったものでしかなかった<sup>86</sup>。いずれの伝統も、真理を世界の実在ないし人間本性とのつき合わせによる対応とみなすという点では、おそらくパルメニデスまで遡ることができるだろう。言語哲学と意味論は、この伝統的な「対応」という概念を「指示 (reference)」という概念に置き換えたのだ、というのがローティの見立てである。彼によれば、真理を、実在への対応と見るか、正当化による保障された主張可能性と見るかという問題は、言語を映像 (すなわち、言語をそれとは独立に存在する意味の表現ないし再現) と見るか、すべての主張がその中でのみ働くものとみなされるゲームと見るか、という問題に帰着するのだという<sup>87</sup>。前者のような真理の見立てにこそ、彼は形而上学的衝動を嗅ぎ取るのだ。ローティは、われわれを始原への問いへの衝動に結びつけていた、いわば偉大なプラトンの建造物の壁や屋根に覆い隠さんばかりに絡みついた宿木の上昇する、言語哲学と意味論という吸枝を引き剥がし、吸収しすぎて複雑になったその繻れを紐解こうとする。そして彼は、選り分けられた吸枝の中からウィトゲンシュタインとデイヴィドソンの養分——すなわち、ダメットの「意味」のような、信念と世界との間の第三の媒体として、言語をみなすのではなく、言語を人間の行動の一部とみなす考えだけ——を「祖父の教え」として吸収するのである。彼をそのように駆り立てるものは、詩人イエイツの言葉を借りて言えば、「実在と正義を単一のヴィジョンのうちに捉える」原理、そして、論証や全体を俯瞰視する単一の記述とか共通の言語、あるいは、われわれが「灰色の真理」と呼んだ、多様な終局の語彙を単一の終局の語彙に収斂させていくという意味での理想化された真理、これを信じようとする衝動からの解放である。だとしたら、ローティ自身はそういった衝動からどこまで自由なのか、という疑問が当然出てくるだろう。とりわけ、「〔……〕「それは赤い」を右辺とするT-文を見出すのと同じやり方で、「それは道徳的に正しい」を右辺とするT-文を見出すであろう<sup>88</sup>」、こうローティが主張するとき、彼は自分が受け入れる引用解除説をもって、可能なすべての語彙の単一の語彙による記述や単一の道徳的原理によって真理と正義を説明すること、すなわち、Tスキーマに主張的真理と道徳的正を併せて語らせること、を行っているのではないのか、言い換えれば、引用解除説に依拠した彼の正当化の概念は真と正を単一の用語 (Tスキーマ) のうちに捉えようとしているのではないかとわれわれは疑いたくなる。

ローティの正当化の概念は、一方で真理という概念と、他方で意味の理論ないし真理論と関わり合う限りでの意味論における意味の概念とが立てる問題群を解消する試み、いわばそれらへの反作

用として成り立っている。われわれが注意しなければならないことは、彼の正当化の概念が「真理」や「意味」一般に対して向けられた反作用ではないということである。彼の反発は次の点にある。すなわち、われわれが言語を信念と世界の間で介在するヴェールのようなものと信じるならば、そして「真理」と「意味」が言語を介して対応や表象としてのみ与えられるものとみなすならば、「真理」と「意味」は、われわれが言語を使ってある特定の言明を肯定ないし否定あるいは判断留保しようとするわれわれの意志、そのときに作用しているわれわれの信念、そこから引き出されるわれわれの行為、そしてその行為の現場である世界の事物との間の、複雑な因果関係から切り離されてしまい、この途方もなく複雑な因果関係の所産であるわれわれ人間とは何の因果的關係も持たないことになってしまうがゆえに、われわれの生の役には立たない、という点である。私は、ローティのこの主張に賛同している。しかし、これに賛同する一方で私は、ローティがダメットに向けた批判——ダメットは、表象としての真理を捨て去る代わりに、真理という概念を論じる際に最も中心的な役割を担うものとしての、意味 (Sense) をわれわれの言葉と世界との間に入る第三の存在者として再導入している、という批判——には、容易に賛同しかねるのである。確かにダメットの (言語) 哲学は、意味の理論に真理の概念が含まれるという入れ子になっている、(指示の因果説が主張するような還元主義とは異なった) 意味論的還元主義である<sup>89</sup>。それゆえに、言明や命題の真偽を問うことは、それらを表現する文の意味とその文の構成要素がその文に与える寄与 (構成意義) とを把握するとはどのようなことかを問うことと切り離して考えることはできないのである。したがってダメットは、意味の理論は認識論的諸問題と形而上学的諸問題と密接な関係を有していると考えている。われわれは意味と真理とを併せて考えるための根拠となる議論のいくつかを既に検討したが、私にはそれらは筋の通ったものに思える。ダメットも指摘するように<sup>90</sup>、ローティはその種の問題をきちんと論じるべきであった。

ローティは、デイヴィッドソン流のフィールド言語学の哲学がわれわれに必要な言語哲学のすべてであるという彼の確信から、この言語哲学とダメットの意味の理論とは相互に対極をなしている、とみなしたのである<sup>91</sup>。彼は、デイヴィッドソンの根源的解釈および寛容の原則が行使されているコミュニケーションの状況から得られるものには、話し手が自分の言語の語に与える特定の意味 (sense) が含まれる必要はまったくないと確信していたのだが<sup>92</sup>、そういった状況以外のどのような場合——たとえば、同一の言語と道徳とを共有する人びとの間でのコミュニケーション——においても言明や命題を表現する文の意味を把握する必要は一切ないのだろうか。もちろん、ないと言いつけるのは誤った見方であろう。フィールド言語学者が遭遇するようなコミュニケーションは、特殊なケースである。日常における言語共同体の成員同士のやり取りでは、言明や命題を表現する文の意味を把握するとはどのようなことか何らかの説明を与えることなしに、真理という概念を考えることはできないだろう。それゆえに、タルスキ型のTスキーマで扱われる真理の概念で考慮されていないのは、まさに、意味論的「真」という語の使い方、すなわち、その意味なのである、と



いうダメットの主張は正当な意見である<sup>93</sup>。

ローティが、真理という概念と共に、それを抱え込む意味の理論を捨て去って、正当化という概念のみを用いるべきだと強く主張する理由は、真理の概念というものを、「記述的態度と規範的態度とを何らかの仕方一つにするような見方<sup>94</sup>」、つまり、「実在と正義を単一のヴィジョンのうちに捉える」見方と同一視するからである。しかしダメットの場合、日常の談話において不可欠な役割を担っている真理の概念は、意味論的概念であって、意味の理論の土台となっている意味論的理論の理論的概念である。それは説明を与えることで正当化を行うためにわれわれが使用する説明の道具である、と理解することができる。この点に関する私の理解が正しいとすれば、ローティがダメットの「意味」をそういった「第三の見方」とみなして攻撃することがプラグマティストに要求される態度だとは言えないであろう。そのような戦略は片手落ちであることを、デイヴィドソンは次のように簡潔に指摘している。

しかし私〔デイヴィドソン〕には、ローティが、真理の概念に関するデューイの態度の真意の半分を見落としているように思える。デューイは、真理〔truths〕は一般的に哲学の特別な分野ではない、と言っているのだ。しかし、彼は、真理〔truth〕とは、役に立つということ〔what works〕なのだ、とも主張している。このことは、真理の概念について述べられるべき興味あることは何一つない、という主張と同じではない。デューイは、役に立つということについてたくさんの興味あることを見出したのである<sup>95</sup>。

ローティが言語と真理に関する自らの議論を正当化するのにたびたび準拠しようとするデイヴィドソンですら、文に対する十全な解釈の実行にあつたては、意味論的な命題から出発しなければならないとみなしてさえている<sup>96</sup>。デイヴィドソンが、ローティが彼を解釈して言う意味において、つまり、意味それ自体は「第三のもの」——環境と因果関係的相互作用としての外部と行為規則としての内部を何らかの仕方一つにした、命題の内容に対して依然として完全な外的な視座——であるとして、これを捨て去ろうとしているのではないことは明らかである。デイヴィドソンもダメットも、意味自体を理論的に構成されたものとみなしおり、真理の概念と深く絡み合った概念であると考えるのである<sup>97</sup>。もちろん、ふたりともローティとは違って、真理は一般的に哲学の分野だと捉えている。そして、ふたりは、真理の概念について語るべき興味のあることは少なからずあると考える。ローティは、気前よく真理を社会学的な分野に明け渡す一方で、その他方では、自身のプラグマティズムの師とみなすデューイがジェイムズから受け継いだ、「役に立つものとしての真理」をどこかに置き去りにしたのか、あるいは少なくとも、このもう一つの「祖父の教え」を十分に受け継いでいないのだ。

もしローティが、哲学の外部から、この二つの真理のもとに、真理なしで正当化は正当化される

のか、という問題を眺めることができたとするならば、彼は、この問題に答えようとしている同業の哲学者たちが依拠する、彼には古い形而上学としか思えないような終局的な概念や語彙を解消することをかれらに要求する前に、必ずしも哲学的概念である必要のない「役に立つものとしての真理」というある種メタな立ち居地——といっても、決して俯瞰的な高みからの眺めではなくて、横並びの他の領域からの眺め——から、それが何にそしてだれにとってどのように役に立つのか、と問うこともできたにちがいない。そうすることは、「真」や「真理」という語と概念を哲学から捨て去ることが、本当に、ローティが主張するような意味において、哲学とわれわれ人間をもっと幸福にすることに役立つのかと、彼自身が同じように問われることを意味するのである。パトナムも認めるように<sup>98</sup>、もしわれわれが、ローティのように、「真」と「真理」という言葉を注意喚起的用途（とその一部である是認的用途）としてのみ受け入れるならば、真理についてそれ以上のことを言うべきことはないかもしれない。しかし、真理については（多くの）語るべきことがとあるという信念は説明されるだけなのであって、その主張こそが真だと証明することはできないのと同様に、ローティのそうした主張は、時間と歴史を超越した真理への信念をせいぜい拒否するだけで、その信念を誤りとして証明することにはならない。ローティが「真」ないし「真理」という語の三つ目の用途として挙げている引用解除説をもってしても、真理について知るべきことが言い尽くされたとは到底みなしがたい。しかも、いまだ多くの哲学者たちは「真」や「真理」という語を捨て去ってはいないし、われわれは、ローティの「真理なしの正当化」が役に立つかどうかを裁定するための、それを実行した場合にもたらされる結果ないし成果を持ち合わせてはいない。したがって、ローティの正当化主義における「真」および「真理」という語の三つの用途の言説は、それらの語を哲学から解消するように哲学者たちを説き伏せる強い説得力を持ち合わせているとは言い難い。それゆえに、たとえ真理が、比類のないほどに不透明なものであって、われわれ哲学者をしばしば混乱させる仕方では（おそらくはおぼろげにしか）捉えきれないのだとしても、すべてではないにしても多くの哲学者にとっては、それについて語るべきことが依然としてあるように思われるのである。むしろ、「哲学者の任務は、真理を軽視することでも崇めることでもなく、否定することでも擁護することでもなく、われわれがなぜこの概念を必要とするのか、この概念を所有するとはどのようなことなのか、を説明することなのだ<sup>99</sup>」、ということ、真理について考察するときのわれわれの態度として保持しておくことは、いつかその説明が真理についてよりよい理解をわれわれにもたらすのに役に立つかもしれないという希望をわれわれが持ち続ける限り、決して無意味ではないだろう<sup>100</sup>。

#### 文末注・参考文献

〔以下、外国語の引用文献のうち邦訳のあるものはそれを明記した。外国語文献からの引用については、

筆者が、それらの邦訳を参考にして訳したか、邦訳に修正を施して訳した。本文中の引用の〔 〕内の文言は筆者による加筆挿入である。]

- 1 W. V. O. Quine, “Carnap and Logical Truth” in *The Philosophy of Rudolf Carnap*, Paul Arther Schilpp, ed., (LaSalle, ILL.: Open Court, 1963): 385-406. p. 406.
- 2 Bernard Williams, *Truth and Truthfulness* (Princeton: Princeton University Press, 2002).
- 3 Michael Dummett, “Truth: Deniers and Defenders” in *Truth and Past*, (New York: Columbia University Press, 2004): 97-116. [「真理：否定者と擁護者」『真理と過去』, 藤田晋吾・中村正利 (訳), 勁草書房, 2004年, 151-179頁]。本稿におけるダメットへの参照はすべてこの著作からのものである。この著作は、彼の他の大著に比べ小著ではあるが、彼の哲学の全貌とエッセンスを知る上で簡明な文体と丁寧な論述で書かれている。
- 4 Hilary Putnam, *Realism and Reason* (Cambridge: Cambridge University, 1983), xvi-xvii. ルビはパトナムによる。[『实在論と理性』, 飯田隆・金田千秋・佐藤勞・関口喜・山下弘一郎 (訳), 勁草書房, 1992年]。
- 5 Hilary Putnam, *Realism and Reason*, xvi. ルビはパトナムによる。
- 6 Dummett, “The Concept of Truth” in *Truth and Past*: 1-28. pp. 26-28. [「真理と言う概念」『真理と過去』, 1-43頁]。
- 7 Dummett, “Truth: Deniers and Defenders”: 97-116. p. 107.
- 8 Dummett, “The Concept of Truth”, p. 3-8.
- 9 Dummett, “The Concept of Truth”, p. 8-9.
- 10 Dummett, “The Concept of Truth”, p. 10.
- 11 ローティは、実際には, “A disquotational use: to say metalinguistic things of the form ‘S’ is true iff \_\_\_\_.” と表記している。Richard Rorty, “Pragmatism, Davidson and Truth” in *Truth and Interpretation: Perspectives on the Philosophy of Donald Davidson*, ed. Ernest LePore (Oxford: Blackwell, 1986): 333-355. p. 335. この論文はローティの哲学論文集 *Objectivity, Relativism, and Truth: Philosophical Papers Volume I* (New York: Columbia University Press, 1991) からの再録である。後者の著作に収録された論文のタイトルの “truth” は小文字の t である。本稿では、前者の文献を引用文献としたので “Truth” の表記にした。
- 12 引用解除説は、デフレーションナリズム (deflationism) とか真理の重複理論ないし過剰理論 (redundancy theory of truth), あるいはミニマリズム (minimalism) とも呼ばれることがある。これは、次のように形式化された文において、左辺の引用符が付けられた, 「真である」という述語を含んだ対象言語の節と、右辺の節とはまったく同一のことを意味している、とみなす。

“S” is true iff S.

(“S” が真であるのは、S であるときそしてそのときに限る。)

この真理定義は、具体的には、たとえば次のように表せる。

“Snow is white” is true if and only if snow is white.

(「雪は白い」が真であるのは、雪は白いときそしてそのときに限る。)

引用解除論者は、左辺「“雪は白い”は真である」と右辺「雪は白い」は、同一である、と主張する。哲学者によって引用解除説の定義は様ざまであるが、一般的に、この真理説は次のような見解を持っている。すなわち、真理という概念は正当な概念ではあるが、タルスキの業績が真理の概念に必要なことを全て成し遂げたゆえに、タルスキの形式言語における真理定義を超えた何か重大な性質が真理にあるのではなく、真理は本質的にトリヴィアルであり、もちろんそれに形而上学的関心を向けるに

値するものではなく、それには哲学的な面白みなどない、という見解である。デイヴィドソンは、デフレーションナリズムに他の二つが含まれるとみなしているようである。デイヴィドソンによれば、たとえば、Scott Soames や Paul Horwich は、タルスキをデフレーションナリストとみなしている。彼らは、タルスキが定義した真理は言語使用者が知っていることについての説明にとって適切な真理条件を特定するかどうかという点では意見を異にする。Soames は否定的であるが、Horwich は肯定的である。デフレーションナリストを自認する Michael Williams は、引用解除という真理述語の形式的特徴が、「われわれの信念のほとんどは真である」というような無数の言明で主張をなす述語を与える、と明言する。パトナムによれば、クワインとローティ、そしてデイヴィドソンは引用解除論者である。しかし、デイヴィドソンのように、厳密な意味においては、引用解除説はタルスキの真理定義に帰することはできないと考える言語哲学者もいる (Donald Davidson, “Theories of Truth”, in *Truth and Predication* (Cambridge, MA.: The Belknap Press of Harvard University Press, 2005): 1-28. pp. 10-15)。デイヴィドソンはその理由として、タルスキの真理定義は、日本語の文「Schnee ist weiss」は真である」と同値の日本語文を与えることはできないことを挙げている。デイヴィドソンは、タルスキの真理定義の解釈に関して次の点は明らかであると述べる。「タルスキの真理述語は、対象言語（におけるどの述語も持たないような語の外延を伴う正当な述語である。〔……〕タルスキは、真理の概念を文に適用される概念としてですら、定義しなかった、ということは明らかなのである。タルスキは、多くの正常に機能する言語の一つひとつにとってのある真理述語をどのように定義するのかを示したのであるが、彼の定義は、もちろん、これらの述語が共通に持つものが何であるのかをわれわれに告げないのである。これを少し言い換えてみよう。彼は、個々の述語がただ一つの言語に適應される、“s はLにおいて真である” [‘s is true in L’] という形式の多様な述語を定義したのではあるが、変数“L”に対して“s はLにおいて真である” [‘s is true in L’ for variable ‘L’] という形式の述語を定義することには失敗したのである」 (Davidson, “Theories of Truth”, p. 15)。ここで参照した、Scott Soames, Paul Horwich, Michael Williams, そして Hilary Putnam の見解については、次の文献を参照にされたい。Scott Soames, “What Is a Theory of Truth?”. *Journal of Philosophy*. vol. 81 (1984): 411-429. Michael Williams, “Epistemological Realism and the Basis of Skepticism”. *Mind*. vol. 97. (1988): 415-439. Hilary Putnam, “A Comparison of Something with Something Else”. *New Literary History*. vol. 17 (1985-86): 61-79. 文末注35も参照。

- 13 Dummett, “Truth: Deniers and Defenders”, p. 109.
- 14 Rorty, “Pragmatism, Davidson and Truth”, p. 127. ルビはローティ。〔 〕内筆者。
- 15 Dummett, “Truth: Deniers and Defenders”, p. 100.
- 16 Bernard Williams, *Ethics and the Limits of Philosophy* (Cambridge MA.: Harvard University Press, 2004), p. 150.
- 17 Bernard Williams, *Descartes: The Point of Pure Enquiry* (Harmonds-worth.: Penguin, 1978), p. 237.
- 18 Hilary Putnam, *The Collapse of the Fact/Value Dichotomy and Other Essays* (Cambridge, MA.: Harvard University Press, 2002), pp. 40-42. [『事実／価値二分法の崩壊』, 藤田晋吾・中村正利 (訳), 法政大学出版局, 2006年]。endnote 31 も参照。
- 19 Richard Rorty, “Is Truth a Goal of Inquiry?: Donald Davidson versus Crispin Wright”, in *Truth and Progress: Philosophical Papers vol. 3* (Cambridge: Cambridge University Press, 1998): 1-42. pp. 19-42 を参照。
- 20 Rorty, “Pragmatism, Davidson and Truth”, pp. 336-338.
- 21 Rorty, “Pragmatism, Davidson and Truth”, p. 344.
- 22 Rorty, “Pragmatism, Davidson and Truth”, p. 337.
- 23 Rorty, “Pragmatism, Davidson and Truth”, p. 338.
- 24 W. V. O. Quine, “Carnap and Logical Truth”, p. 406.
- 25 Putnam, *Realism and Reason*, xvii. ルビはパトナムによる。パトナムは、「意味・無意味・感覚」(“Sense, Nonsense, and the Senses”, in *The Threefold Cord* (New York: Columbia University Press, 1999) と題す

## 真理なしで正当化は正当化されるのか

る1994年のデューイ記念講義以降、真理を主張可能性として定義できるとは考えていない。現在、パトナムは、常識実在論、すなわち、哲学者ではない普通の人が信じている実在論である素朴実在論の立場を採っている。「……」真理は「理想的」（すなわち、十分よい）条件のもとでの保証された主張可能性として定義できる、そして、十分よい条件とは何かということ自体は研究の過程においてわれわれが決定できることだ、と信じていた。私は現在では、「真」という語の使い方や、真理とわれわれの有する種々の意味論的概念・認識論的概念との間の錯綜した関係について、哲学的には語られるべき多くのことが存在すると思うけれども、そのような〔真理の〕定義がうまくいくとは、それどころかそもそも真理を定義する必要があるとは、もはや考えていない」（Putnam, *The Collapse of the Fact/Value Dichotomy and Other Essays*, p. 107. [ ] 内筆者）。

- 26 Donald Davidson, “A Coherence Theory of Truth and Knowledge”, in *Truth and Interpretation: Perspectives on the Philosophy of Donald Davidson* (Oxford: Blackwell, 1986): 307-319. p. 308. Rorty, “Pragmatism, Davidson and Truth”, p. 137. [ ] 内筆者。
- 27 Dummett, “Truth: Deniers and Defenders”, p. 106.
- 28 Dummett, “Truth: Deniers and Defenders”, p. 114, p. 115.
- 29 次の論文を参照。Richard Rorty, “Is Truth a Goal of Inquiry?”. Akeel Bilgrami, “Is Truth a Goal of Inquiry?: Rorty and Davidson on Truth”, in *Rorty and His Critics* (Oxford: Blackwell, 2000): 242-262. R. Rorty, “Response to Akeel Bilgrami”, in *Rorty and His Critics*: 262-267.
- 30 Rorty, “Pragmatism, Davidson and Truth”, p. 335. ローティはその後いくらか譲歩して次のように述べている。「私は、「真」には説明的使用は何一つない、という1986年に〔「プラグマティズム・デイヴィドソン・真理」において〕した主張を撤回することにやぶさかではない。この主張は、「それは真だ！」は、なぜ科学がうまくいくのか、あるいは、なぜ私の信念のうちの一つを誰かと共有しなくてはならないのかについての説明の助けにならない、という点を強調するには誤解を招きやすいものであった」（Rorty, “Is Truth a Goal of Inquiry”, p. 25. [ ] 内筆者）。
- 31 Dummett, “Truth: Deniers and Defenders”, p. 106.
- 32 Donald Davidson, “Defense of convention T”, in *Inquiries into Truth and Interpretation* 2nd ed. (New York: Oxford University Press, 2001): 65-75. p. 65. 参照。
- 33 Rorty, “Is Truth a Goal of Inquiry?”, p. 22.
- 34 規約Tとは、真理の理論は、定理として、対象言語の各文に対してT-文を生成しなければならない、という要求である。
- 35 パトナムは、可能世界という概念を援用した、引用解除説に対する批判を行っている。Hillary Putnam, “On Truth” in *Words and Life* (Cambridge, MA.: Harvard University Press, 1994): 315-329. pp. 319-327 参照。この批判についての、パトナムの論点を簡略化して述べれば、以下のようになる。まず、引用解除論者によって、通常、あたかもタルスキの規約Tであるかのように表記されるTスキーマを考えてみよう。

“P” is L-true if and only if P.

（“P”はL-真であるのは、Pである場合そしてその場合に限る。）

これは、あるLという言語におけるPという文が真であるのはPである場合に限る、という意味である。もしL-真がある言語Lにとっての適切な真理述語なのであれば、このスキーマに代入可能なすべての事例は、真でなければならない。引用解除論者は、このスキーマのすべての事例が主張可能である場合に、われわれはある述語が「真」と外延をなすのを知ることによって「真」という語を理解する、と考える。この考えは、「真」という語の意味は規約Tによって何らかの形で固定されているという考えと結びつけられているのである。しかし、あるLという言語におけるPという文が真であるかどうかは、その文がどのような世界においてなのかに存する。つまり、Pを構成する語がまったく異なった使われ方をされる世界では、Pの真理値は異なるだろう。あるL言語とは別の言語では、L言語の

語彙で構成される「雪は白い」は、たとえその世界でも雪というものは白くとしても、まったく異なる語によって作られる文となりうる。あるいは、雪は白くない世界というのも想定できる。その場合でも、Tスキームの右辺の文は左辺の引用符が付けられた文とまったく異なるだろう。そういった世界では、たとえば、「雪は白い」という語の集まりは「やかんはストーブの上にある」と翻訳されるかもしれない。このような特殊なケースでは、次のような文を受け入れるのではない限り、その状況で使用されるものとして、Lにおける真理述語としてのL-真理という述語を受け入れるわけにはいかない、ということになる。すなわち、

“Snow is white” is L-true if and only if the kettle is on the stove.

(「雪は白い」はL-真理であるのは、やかんはストーブの上にある場合そしてその場合に限る。)

を受け入れるのでなくてはならない。そうすると、“L-true”はその時々発話者が語ったことを再確認するための機能でしかない。それゆえに、たとえその発話者が、「私がいま行ったことの真偽は、私の束の間の記憶や経験に存するのではない」と言ったとしても、それは単なるノイズでしかなく、意味することとなり、一種の独我論に陥るのだ、とパトナムは論じている。

36 ダメットは、いくつかの例を引き合いに出してこのことを説明している。たとえば、その中の一つに倣って次のように説明できる。ただし、結婚は異性間の結婚だけを意味するものとする。

クララの夫はイタリア人だ。

クララはイタリア人と結婚している。

これらの文は互いに同一の主張内容を持つ。なぜなら、クララが結婚していることを知らなかった聞き手は、彼女が結婚していたことを、第一の文から知ると同様に、第二の文からも知るからである。だとすれば、「クララの夫はイタリア人だ」が真であるのは、クララはイタリア人と結婚している場合そしてその場合に限る」というT-文を組み立てることができるように思われるにちがいない。しかし、それらの文は同じ構成部分意義を持ってはいない。なぜなら、それぞれ文の否定文は互いに同値ではないからである。第一の文の否定は、一般的に、クララが結婚をしていないことを意味しない。第二の文の否定は、クララがイタリア人とは結婚していないことを意味するが、イタリア人以外の男性と結婚しているかもしれないし、そもそもだれとも結婚していないかもしれないことを示唆する。したがって、個々のT-文が真であるためには、その両辺の言明の主張内容が同一であるだけでなく、構成部分意義までも同一でなければならない。それゆえに、個々のTスキーム文の真理を説明する場合に、われわれは、それらの言明文を構成する語や句の意味が、これらが構成部分となっているところの文に対してなす寄与、すなわち、意味を考察するのでもなければならないのである。したがって、意味の理論を抜きにして真理について考察することは正当化できない、というダメットの主張には無視できない根拠がある。Dummett, “The Indispensability of the Concept of Truth”, pp. 32-34 参照。

37 Dummett, “Truth: Deniers and Defenders”, p. 113.

38 Rorty, *Truth and Progress*, p. 21.

39 Dummett, “Truth: Deniers and Defenders”, p. 109.

40 Bilgrami, “Is Truth a Goal of Inquiry?”, p. 244.

41 Rorty, “Universality and Truth” in *Rorty and His Critics* (Oxford: Blackwell, 2000): 1-30. p. 5.

42 ローティは、タルスキ型のT-文に示される引用解除の用途もまた経験的な概念だとみなしている。

Rorty, “Response to Donald Davidson”, in *Truth and Interpretation*, p. 76.

43 Bilgrami, “Is Truth a Goal of Inquiry?”, p. 245.

44 Bilgrami, “Is Truth a Goal of Inquiry?”, p. 245.

45 Bilgrami, “Is Truth a Goal of Inquiry?”, p. 245.

- 46 Rorty, “Response to Akeel Bilgrami”, p. 265.  
47 Rorty, “Response to Akeel Bilgrami”, p. 265.  
48 Rorty, “Response to Akeel Bilgrami”, p. 265.  
49 Rorty, “Response to Akeel Bilgrami”, p. 265.  
50 Dummett, “The Concept of Truth”, p. 10. この文の最初のルビはダメットによる。あとの二つは筆者による。  
51 Dummett, “The Concept of Truth”, p. 12.  
52 Dummett, “Truth: Deniers and Defenders”, p. 110.  
53 Dummett, “The Concept of Truth”, p. 21.  
54 Dummett, “The Concept of Truth”, p. 19. ルビは筆者。  
55 Dummett, “The Indispensability of the Concept of Truth” in *Truth and Past*, p. 31-32. [「真理概念の不可欠性」『真理と過去』, 45-62頁]。  
56 Dummett, “The Indispensability of the Concept of Truth”, p. 35.  
57 Dummett, “The Indispensability of the Concept of Truth”, p. 36.  
58 Dummett, “The Concept of Truth”, p. 26.  
59 Dummett, “The Concept of Truth”, p. 26.  
60 Dummett, “The Concept of Truth”, p. 24.  
61 Dummett, “The Indispensability of the Concept of Truth”, p. 35.  
62 Rorty, “Pragmatism, Davidson and Truth”, p. 349.  
63 Rorty, “Pragmatism, Davidson and Truth”, p. 355. マイケル・ウィリアムズは、真理の理論に認識論は不要だという主張にとって、説得力を持つ議論を展開している。Michael Williams, “Do We Need a Theory of Truth for Epistemological Purposes?”, *Philosophical Topics*. vol. 14, no. 1 (spring 1986): 223-242.  
64 Rorty, “Pragmatism, Davidson and Truth”, p.353.  
65 ローティは、ダメットが「実在論と反実在論に関する問題を二値性の観点から提起している」として、「彼〔ダメット〕は、「下の方の階」——たとえば、「それは赤い！」——という言明の場合には、二値性が確立されているということを疑わない。そのような言明が真であるとはどういうことなのか——このことを分節不可能な形で知ってさえいれば、おそらく、赤さに関する実在論者たるに十分であろう」と述べ、ダメットを実在論者だと見ている (“Pragmatism, Davidson and Truth”, p. 350)。しかしこれに関して、少なくとも『真理と過去』以降のダメットが考えていることは、次のとおりである。

ある対象の持つ色が赤とオレンジの境界線上にあるとしよう。すると、その対象を指差して「それは赤かオレンジのどちらかだ」と述べることは、確かに真なる言明をすることである。オレンジのものは赤くはないのだから、「それは赤であるか、赤でないかのいずれかだ」と言ったとしても、同様に、真なる言明をしたことになるだろう。しかし、「それは赤い」という言明について、それは真か偽のいずれかである、と言うのは誤りであろう。なぜなら、境界線上のケースに使われる場合には、「それは赤い」も「それは赤くない」も間違いではないが、偽なる言明、ないし真なる言明の否定を主張することは、間違いであるからである。タルスキの真理定義が英語に対して与えられると想定してみても、同じ議論が成り立つ。タルスキは、彼の定義を「真理の意味論的概念」と称しているが、その定義で勘定に入れられていないのは、まさに、意味論的理論における「真」という語の使い方なのである (Dummett, “Truth: Deniers and Defenders”, p. 111)。

それゆえに、「われわれが、文を含め、ある表現の意味を理解することは、単にその意味論値を把握することだけに存するのでない。〔……〕どの対象もわれわれに特定の仕方与えられるのである」(Dummett, “The Concept of Truth”, p. 9)。

- 66 Dummett, “The Indispensability of the Concept of Truth”, pp. 29-30.
- 67 Dummett, “The Concept of Truth”, pp. 26-27. ルビは筆者。
- 68 ただし、ダメットは、過去時制についての説明においては、实在論の方向に見解を修正している。「過去時制に関しては、正しい説明は純粹な正当化主義の線に沿っていないのだ、と私は論じてきた。純粹な正当化主義の線に沿った説明は、過去についての支持しえない反实在論の見方の例示だ、ということになるだろう。過去時制の理解に関してわれわれがここで与えた説明は、その性格においてなお正当化主義であるが、その理論は实在論の方向に修正されている」。Dummett, “The Semantics of Past Tense” in *Truth and Past*: 57-72. p. 70. 本稿では、ダメットの、過去時制の意味論および形而上学については触れないで、彼の意味と真理に関する言説だけを扱っている。
- 69 Dummett, “Truth: Deniers and Defenders”, p. 115.
- 70 ダメットの「使用」については次を参照。Dummett, “The Concept of Truth”, pp. 26-28.
- 71 Rorty, “Pragmatism, Davidson and Truth”, p. 353. ルビはローティ。ローティのこの論文の脚注53も参照。
- 72 Rorty, “Pragmatism, Davidson and Truth”, p. 352. ローティによるデヴィットの引用。Michael Devitt, “Dummett’s Anti-Realism”, *Journal of Philosophy*, 80 (1983), pp. 89-90.
- 73 cf., Dummett, “The Concept of Truth”, pp. 10-11.
- 74 引用箇所は、デヴィットがダメットの命題的仮定と呼ぶものである。Devitt, “Dummett’s Anti-Realism”, p. 84. ルビは筆者。  
ローティは、「プラグマティズム・デイヴィッドソン・真理」において、彼のダメット批判の重要な部分をデヴィットの論文 “Dummett’s Anti-Realism” に頼っている。ローティは、デヴィットによるダメットの意味の理論の次のような定式化は正しいと述べている。

デヴィットが正しく指摘するように、ダメットは、「XはSの意味を知っている」と「Sの意味はSの真理条件である」の二つの文から、「XはSの真理条件がTCであることを知っている」を推論しようとする。これは、われわれが、「XはSの意味を知っている」を「Sに意味なるものが存在し、Xはそれを直接知っている」と解釈する場合にのみ可能であるような推論である。そういう解釈を行うのは、命題的仮定〔Lの話し手によるLの文の理解は、その文がかくかくの状況でLにおいて真である、ということとその話し手が知っていることに存する、という仮定〕を受け入れる者だけであろう (Rorty, “Pragmatism, Davidson and Truth”, p. 352; Devitt, “Dummett’s Anti-Realism”, p. 86. [ ] 内筆者)。

しかし、私にはこのような定式化がダメットの複雑な、そしてしばしばパラドックスに満ちた言説の正当な簡略化とはどうしても思えない。この定式化は、まるでコンピュータが、計算に必要な一定の条件が設定されたときに、答えを自動的にはじき出すように、XがSの真理条件さえ知っていれば、後は論理がSの意味を自動的に確定するとでも言っているかのようである。しかし、多くの(言語)哲学者が認めるように、論理的原理と意味論的原理は等値ではない。さらに、デヴィットとローティによれば、ダメットは、「Sの主張を最終的に正当化する条件が成立しているときに、話し手がその条件をそうした正当化を行うものとして認知する立場に自らを置くような振る舞いだけが、話し手がSを理解していることを明示しうる振る舞いなのである」、と信じているのだという。(Devitt, “Dummett’s Anti-Realism”, p. 91; Rorty, “Pragmatism, Davidson and Truth”, p. 352. ルビは筆者)。この見解をダメットの次の論述と比べてみよう。

われわれは、[……] [Sの] 主張が真であるとはどういうことかを、それが真であることを確立するためにわれわれが持っているどのような手段からも独立に学ぶのではない。[そういうことが] どうしてできるだろうか。ある与えられた命題を主張する地点にも否定する地点にもいないとき、それにもかかわらず、その命題を真にしたり偽にしたりするようなものが



## 真理なしで正当化は正当化されるのか

われわれに示されているなどということはないのである。したがって、この種の理論によれば、言明の意味を把握するとは、何がその言明を主張したり否定したりするかを正当化することを知るることなのである (Dummett, “Truth: Deniers and Defenders”, p. 114. [ ] 内筆者)。

私は、「話し手がその条件をそうした正当化を行うものとして認知する立場に自らを置く」とデヴィットが解釈したときの「立場」を、「ある与えられた命題を主張する地点」とか「ある主張が真であることを確立するためにわれわれが持っている手段」と解釈する。そうすると、デヴィットが指摘するように、確かにダメットは、反全体論的認識論に与しているように思えてくる。しかし、「全体論者にとっては、真理は言わば、常に証拠を超えている」のだとしても、このこととが、「Sに関するXの理解は、ダメットが思い描くような種類の認知能力には決して明示されない」(Rorty, “Pragmatism, Davidson and Truth”, p. 353, 「明示されない」のルビは筆者)ということの意味するのではない。ダメットは、真理の全貌が一度に認知能力に示されうるとは考えていない。ダメットの正当化主義においては、「何が言明を主張したり否定したりすることを正当化することを知ること」が、意味の理論を与え、真理概念はこの理論に適合しなくてはならないゆえに、真理概念も正当化によって与えられる、とみなすのである。そして、「ある言明を真であるとみなすのは、その言明の正当化を見つけることが可能であるか、可能であったかの場合である、と考えた方がよいかもしれないのである」(Dummett, “Truth: Deniers and Defenders”, pp. 114-115)。それゆえに、真理条件論が個々の文の真理条件の説明を積み上げていくことを試みることは想像に難くはない。だとすれば、真理条件論と同様、そのような可能な正当化の積み上げを続けていくことが真理についての正当化主義に求められているということは、反实在論者たるダメットが単純な真理の対応理論や实在論に与していることを意味しない。

75 Dummett, “Truth: Deniers and Defenders”, pp. 114-115.

76 Dummett, “Truth: Deniers and Defenders”, p. 114.

77 Dummett, “Truth: Deniers and Defenders”, p. 115.

78 Dummett, “Truth: Deniers and Defenders”, p. 114.

79 Rorty, “Is Truth a Goal of Inquiry?”, p. 21.

80 Dummett, “Truth: Deniers and Defenders”, p. 114.

81 Rorty, “Pragmatism, Davidson and Truth”, p. 348. ルビは筆者。

82 たとえば、*Truth and the Past* におけるダメットの次のような論述を参照。「[……] 意味の理論の一般的形式の第一段階の輪郭描写は、一般に、文の意味が何に存するとその理論がみなしているか、ということによって与えられるのである」(112)。「[……] その命題を表現する文の意味を把握するとはどのようなことかにか何らかの説明を与えることなしには、おそらくいかなる進歩も望みえないであろう」(111)。「語あるいは文の意味をそもそもはじめから説明すべきだとすれば、二つのことが達成されなければならない。われわれは、語や文が表現するところの概念や命題を、あるいは、少なくとも、概念や命題を把握するとはどのようなことなのかを説明しなければならない。またわれわれは、その語や文が、その概念や命題を表現するのは何によってなのかを説明しなければならないのだ。語や文の理解には何が含まれているのかを完全に説明することを目指すどの説明も、この二つの側面を共に扱わなければならないのである」(2-3)。

83 たとえば、“Defense of convention T”におけるデイヴィドソンの、規約Tの中心的な利点に関する次のような論述を参照。「それ[元来の問題]は、ある文(もしくは発話、あるいは言明)が真であるとはどのようなことか、ということである。混乱の恐れが生じるのは、その問題が、文を真にするのは何か、という問題に変形されたときである」(70)。[ ] 内筆者。

84 デリダによる形而上学の援用へのローティの批判については、拙著、「原理なき自由——リチャード・ローティの作り出される倫理——」、『聖学院大学論叢』、第20巻、第2号、2008年(59-89頁)。74-77頁を参照。

85 Richard Rorty, *Consequences of Pragmatism* (Minnesota: The University of Minnesota Press, 1982), xvi. [『哲学の脱構築——プラグマティズムの帰結』、室井尚・吉岡洋・加藤哲弘・浜日出夫・疋茂(訳)、

御茶の水書房, 1994年]。

- 86 Rorty, *Consequences of Pragmatism*, xvi.
- 87 Rorty, *Consequences of Pragmatism*, pp. 127-132.
- 88 Rorty, “Pragmatism, Davidson and Truth”, p. 351.
- 89 ただし、それは、サイモン・エヴニンが言うように、「意味論的事実についての知識は特定の実践的能力を身につけていることにほかならないと考えようとする、ある種の行動主義的還元主義である」。Simon Evnine, *Donald Davidson* (Palo Alto, CA.: Stanford University Press, 1997), Chapter 7, section 5. [サイモン・エヴニン, 『デイヴィドソン——行為と言語の哲学』, 宮島昭二 (訳), 2004年]。
- 90 Dummett, “Truth: Deniers and Defenders”, p. 110.
- 91 Rorty, “Pragmatism, Davidson and Truth”, p. 345.
- 92 Rorty, “Pragmatism, Davidson and Truth”, p. 348-349.
- 93 Dummett, “Truth: Deniers and Defenders”, p. 111.
- 94 Rorty, “Pragmatism, Davidson and Truth”, p. 345.
- 95 Davidson, “Theories of Truth”, p. 9. [ ] 内筆者。
- 96 ここでの議論は、サイモン・エヴニンの前掲の著書(第7章5節)によるところが大きい。エヴニンによれば、「[……] デイヴィドソンは、意味論的ないしは命題的な、あるいは心主義的な用語を使用するに吝かではないばかりか、そうせざるをえないとみなしてさえいるのである。それゆえに、デイヴィドソンの考えるところによれば、意味の理論は完結したものでなければならないとするダメットの要求は、単に要求として強すぎているだけでなく、方向を誤っている、ということになるにちがいない」(サイモン・エヴニン, 『デイヴィドソン』, 295頁。邦訳からほぼそのまま引用)。
- 97 意味それ自体についての彼らの見解の違いは、「意味を(行動主義的ないし因果物理的な種類の)純粹な非意味論的な事実に関係づけられるものとして、自らの理論を捉えることをデイヴィドソン拒否している」のに対して、「ダメットは、依然として、この還元は意味の理論の課題に含まれるものと考えている」ということにある。そしてこの見解の違いは、「意味の理論の本性と、意味の理論は何を成し遂げるべきか、をめぐる根本的な見解の不一致なのである」(サイモン・エヴニン, 『デイヴィドソン』, 294-295頁。邦訳からほぼそのまま引用)。
- 98 Putnam, “On Truth”, p. 322. もちろんパトナム自身は、引用解除説の主張を受け入れているのではない。彼は引用解除説を信奉する哲学者は少ないのではないかと述べている。
- 99 Dummett, “Truth: Deniers and Defenders”, p. 116.
- 100 ただし、ローティの用語を用いて言えば、そのような真理の説明と理解が、そういった真理を主張しない他者の苦しみや辱めを少なくとも拡大しない限りにおいて、それは無意味ではないだろう。